
仮面ライダー・スリープレイブス

龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー・スリブレイブス

【Nコード】

N3055B

【作者名】

龍牙

【あらすじ】

戦いの中全てを失った紅き龍の騎士、夢を護る紅き閃光の戦士、人を守る剣『剣』を司る青き雷の戦士…三人の勇者達の物語りが今ここに集結する。

予告編

失われた鏡の中の世界、その中で譲る事の出来ない己の願いを掛けて戦い散っていった者達

人とは別の種に変わりながら閃光の鎧をその身に纏い大切なものを守るために為に戦う者達

世界の覇権を掛けて戦う53種の不死生物達アンデットから人々を守るため、最後の切り札となり戦う者達

それを人は『仮面ライダー』と呼ぶ

己の願いを掛けて戦った者達の中のただ一人の生き残り、友を仲間を愛した人を失った最後の勝者、紅き龍の騎士が得た物は『空虚』

「なあ…オレの戦いはなんだったんだ…友達をこの手で殺して、結局、オレには何も…残らなかった…。」

仮面ライダー龍騎…『霧島 輝』

進む道、戦う目的…それを探し戦い続ける者…その者、真紅の光の戦士の進む先に有るは…『滅び』か『未来』か…？

「まっ、先の事は分からない、後の事は気にしない」世の中悩むだけ損ってね。だったら、オレは後悔しない様にするだけ、オレが守りたいものの為に戦うだけさ」

仮面ライダーファイズ…『風間 浩平』

人を守るため己が全てを掛けて戦う者、強き意思を持って切り札となる最強の『A』…青き切り札、人を守る剣…『剣』を司る青き雷の戦士の先に有るのは『希望』か『絶望』か…？

「オレが戦うのは義務でも使命でもない、そんな物は知った事じゃない。オレが戦うのはオレが人を守りたいから、守る！ ただそれだけだ！」

仮面ライダーブレイド…『伊達 翔』

別々の道歩いていた三人の勇者達の道は一つに交わる、それは旧友との再会…勇者達の会合、それは彼らの闘いの先に何を作り出すのか…

「お前達も…。」

「話は後だ、このアンデットを封印する。」

「アンデットね、オルフェノクとは違うようだな。」

戦士達の道は一つに重なる、人を守るといふ一つの目的のために

「相手は同じ龍の力を持つ者。オレを…ライダーバトルの勝者を舐めるなあ…!!」

「へっ…やるねえ、アキラ。」

「オレ達のスピードでは奴の動きには着いていけない…動きを止めた時がチャンスだ。」

彼らは戦っ…

「」「」変身…!!」「」

『Turn Up』

『Standing by…Complete』

そして、発動する最強の力

「オレに…再び力を。」『サバイブ』

烈火の生命を宿す新たなる紅き戦士『仮面ライダー龍騎サバイブ』

「さあ、行くぜ。」

全てを焼き尽くす最強の真紅の光『仮面ライダーファイズプラスターフォーム』

「オレに力を貸してくれ、キング…!!」

13の戦士達に認められた金色の王『仮面ライダーブレイドキングフォーム』

紅蓮の龍騎士『仮面ライダー龍騎』

紅き閃光『仮面ライダーファイズ』

紫紺の稲妻『仮面ライダーブレイド』

龍の騎士は空虚と共に進み、閃光の戦士と稲妻の戦士は未来を目指し歩く…

仮面ライダー^{ブレイド}剣+仮面ライダー555+仮面ライダー龍騎

『スリープレイブス』

今、三つの伝説が交差する

第一話『運命の会合』

東京にあるビルの一室

「…仮面ライダー…それはオレの事ですか、編集長？」

青年『霧島 輝』は目の前にいる相手に対して疑問を浮かべながらそう言う

「イヤ、お前の事じゃない。ここ一年で広がった都市伝説だ。謎の怪物…アンデットとオルフェノクから人を守る正義のヒーローって奴らしい。」

彼のアルバイト先のWebニュース配信会社『OREジャーナル』では彼の秘密を大半の人が知っているために輝は簡単に次の言葉を口にする事が出来た

「一応、最近の謎の怪物退治はオレもしているんですけど…。まあ、ここ一年で広がったという事はオレには関係の無い噂でしょうね。」

輝が『正義のヒーロー』と言う点で自嘲の笑みを浮かべて自分の考えを述べる

「そこでだ、お前に仮面ライダーについて取材してきて欲しい。」

「高校生のバイトに何を頼んでいるんですか!？」

「まあ、お前も仮面ライダーなんだから安全だろう、特別ボーナスと授業に出れなかった分と取材で遅刻した分の特別手当も出すから。」

」

「はあ…。」

気乗りはしなかったが気になる事があったので輝はその仕事を引き受けた…それは古い友人達との再会…そして、戦う事に疲れた紅き龍の戦士が再び戦場に舞い戻るきっかけとなる

東京、新宿区にある高校

「ふーん、一年前の集団失踪と行方不明…それにここ数ヶ月のオルフェノクとは違う怪物か…都市伝説の半分はオレが原因だとしても」

青年『風間 浩平』の前に立つ少女『速水 瑞花』は浩平を指差して自信を持って断言する

「そうよ、浩平。半分はあなただけど半分は別の人よ。」

「へー…面白そうだな…会ってみるか…オレとは違う他の仮面ライダーに。」

浩平はそう言つて立ち上がると瑞花の声を無視して教室を飛び出していった…現在、三時間目…放課後までまだ時間がありすぎる…

紅き閃光の戦士は自分の好奇心によって動き始めた…それは、運命を変える仲間と言ふ新しい力を得るきっかけ…

同じく新宿区にある別の高校の一室

「ふーん、一年前の原因不明の集団失踪と行方不明事件ね…。」

青年…『伊達 翔』はスクラップされている新聞記事に目を通しながら呟く

「そうだ、ここ数ヶ月のアンデットとオルフェノクとは違う謎の失踪と行方不明。被害者には全員、共通点と言える物が無いという謎の事件だ。」

翔は目の前にいる青年『羽柴 翼』の説明を聞きながら新聞のスクラップにある写真とどこから入手したのかは完全に謎だが新聞記事の切り抜きとは違う詳しいプロフィールが書かれている手書きのメモに視線を向ける

「性別、年齢、住居、身長から趣味、行方不明になる直前の行動に

至るまで見事にバラバラだな…これに犯人がいるとしたら完全に無差別に広範囲にわたって移動して、犯行を行った事になるな。」

そう呟いてページをめくって行くと一枚のページに翔は目を奪われた

「な!？」

新聞からの切抜きには『仮面ライダー』と書かれたメモの写真が貼られていた

「仮面ライダー…あの頃はまだ…オレは仮面ライダーになっていなかったはずだぞ…」

「そこで調べてみたんだが…謎だ。ただ…その中にいる12人だけは例外的に『霧島 輝』と言う人物と接触を持っている。」

『霧島 輝』…その名を聞いた瞬間、翔は表情を変える

「…輝と関係が…」

翔の呟きを無視して翼は言葉を続ける

「それにその中の一人は輝と同じ下宿先で暮らしていたし、半分以上は年齢も近いし、その多くが同じ学校の生徒だ。」

翼の得意げな説明を絶句したまま聞いている翔に翼は再び視線を向けた

「どうした？」

「…イヤ…なんでもない…」

口ではなんでもないと言っているが翔のその表情は明らかに何かを隠している表情だった

翔は暫く考え込んだ後、突然立ち上がるとそのまま教室の出口に向かって走り出した

「早退する。」

そついい残して翔は教室を飛び出していく

「…何か思う所が有ったのか…」

翼はそんな事を考えながら思考の中に意識を移す

（…翔の事はさておき、最近完成させた新しいライダーシステム『レンゲル』…四枚目のエース『クラブ』のカテゴリに対応するライダーとして設計したんだけど…誰が奪ったんだ？）

完全に翔の事は信用してと言えば聞こえがいいが…言い方を変えれば翔の事は何一つ心配もせずに自分の思考の中に翼の意識はあった

←奪った本人の弁

『…カテゴリAもなしにライダーシステム作ったのかあの男は…手間が省けてラッキーだが（ハ―ハ；）（by ダイヤのJの人）』

カードに選ばれた戦士は動き出す…新しい闘いの中へ…

輝は私服姿で歩きながら自分の隣にある鏡に視線を向けて立ち止まる

「…謎のヒーロー…仮面ライダーか…その名はそんなに良い物じゃないのにな。」

輝は自分の手の中にある龍の顔を象った紋章のような物が刻まれているケースに視線を向ける

「なあ…オレの戦いはなんだったんだ…友達をこの手で殺して、結局、オレには何も…残らなかった…。」

自嘲気味の笑いを浮かべながら輝は言葉を続ける

彼の視線の先に有る鏡の中には一体の紅い龍がいる、現実には存在していない龍が虚像の世界の中には存在している、その存在は彼以外の誰にも見えていないのか他の通行人達はそれに気付く様子は無い
輝が鏡から視線を外して再び歩き出そうとすると悲鳴と共に彼の視界の先に現実には存在しない…自分と契約している龍以外には今はもう存在していないはずのモンスターが映った

「モンスター…灰色の怪物とは違う奴か!？」

逃げる人々の中で輝はその先にいる二足歩行で立つライオンに似た

怪物を睨み付けながら握っていたケースを龍が存在している鏡に向ける

「ドラグレッダー…もう一度お前の力…借りるぞ！」

輝の言葉に鏡の中に存在している紅龍…無双龍ドラグレッダーが嬉しそうに咆哮すると輝は手の中に有るかつて一人の男が作り出し多くの人を巻き込んだ十三の己が願いを賭け、戦うための力を与える道具『カードデッキ』を鏡に向け、戦うための力を自身に与える言葉を叫ぶ

『変身！！！！』

鏡の中の虚像にベルトが巻きつくと同時に現実世界にいる輝にも同じベルトが巻き付く、それと同時に輝は力を与える叫び声をあげ、カードデッキをベルトの正面に差し込むと二つの赤き影が彼に重なり、彼は姿を変える…そう…十三人の仮面ライダー達の願いを賭けた戦いの最後の勝利者…『仮面ライダー龍騎』へと…

「…もう…誰からも何も奪わせない！！…それが全てを失ったオレに残る、唯一つの願いだ！！！」

目の前に立つライオンに似た怪物に向かって龍騎は走り出す、奪う為の戦いではなく、守るための戦いへと

時は少し前に戻る、浩平は携帯電話から聞える幼馴染の言葉を聞き流しながら道を歩いていた

「はあ、あいつもホントにお節介だな。」

適当な所で一方的に切ると彼は中学生の頃に出会った二人の友人の事を思い出した

「そういえばこの近くだったな、あいつらに会ったのは…元気にしてるかな、あの二人。」

楽しそうにいいながら浩平は周りの景色に視線を向けると悲鳴と共に逃げ惑う人の波が向かって来た

「な、なんだ!？」

逃げる人を避けながら浩平はその先に視線を向ける

彼の視線の先に現れたのは獲物を探すように動きを止めている人の様に二足歩行をした一体のライオンに似た怪物だった

「オルフェノク…とは違うようだな、あれが噂の怪物って訳か」

その怪物を見て楽しそうに言い切りながら、浩平はどこからか、いくつかのパーツが付いたベルトらしき物を取り出した…完璧に余談だがそれらは明らかにポケットなどには収まる物では無い…どこに

隠していたのかは…深く考えないほうがいいだろう

「さーて、行くぜ。」

『Standing by』

不敵な笑みを浮かべながらベルト型の『ファイズドライバー』を腰に巻き、携帯電話型変身ツール『ファイズフォン』を取り出しファイズフォンにスタートアップコード『555』を入力し、Enterキーを押すと浩平はファイズフォンを高く掲げる

『変身！！！』

『Complete』

叫び声と共にファイズフォンをファイズドライバーに挿入すると機械的な音が響き浩平の全身に赤いフォトンブラッドが流れ、彼は紅き閃光の戦士『仮面ライダーファイズ』へと変身する

「さーて…。」

調子確かめるように両手首を軽く動かすとファイズはライオンに似た怪物を睨みつけ、その怪物と戦うために走り出す

時は再び戻る、その怪物『アンデット』と戦う戦士はそこに向かっ

て歩いていた

「チツ、一番近いのはオレか!? 間に合え!!!」

他の用事で高校を早退した翔は『アンデットサーチャー』に有った反応を知り、そこに向かって走り出していた

(この先か?)

素早くそれを取り出し腰に近づけるとそこから伸びる物が彼の腰に巻き付く

その機械『ブレイバツクル』とは別に取り出した一枚のカブトムシの絵が描かれた一枚のトランプ(スペードのA)を取り出しブレイバツクルに差し込む

『変身!!!』

『Turn Up』

戦うための力を与える言葉を叫ぶと同時にカードを収めたベルトの一部を回転させると蒼いスペードの紋章が現れ、彼の正面に蒼く輝くカードと同じ絵柄が出現し、彼がそれをくぐると同時に彼は戦士へと姿を変える…そう…不死の怪物『アンデット』から人々を守る戦士『仮面ライダーブレイド』へと…

ブレイドはその視線の先に二足歩行のライオンに似た怪物『ライオンアンデット』を睨みつけ走り出した

『ソードベント』

「はぁ！」

機械的な声が響くと同時に現れた剣を持ちライオンアンデットに向かって
かつて龍騎はそこ剣を振り下ろす

ライオンアンデットが龍騎の振り下ろす剣を避けるとそれを予想して
いたように龍騎はライオンアンデットの回避した場所に向かって
剣を振る

龍騎の持つ剣『ドラグセイバー』の一閃がライオンアンデットの体
を切り裂くと一瞬だけ怯んだライオンアンデットが龍騎から離れよ
うとした時、龍騎は素早く次の行動に映る

ベルトに装着されたカードデッキから素早く一枚のカードを取り出
し腕に有る龍の頭を象ったカードリーダー、『龍召機甲ドラグバイ
ザー』の一部をスライドさせそこにあるスペースに取り出したカー
ドを差し込み、再びスライドさせる

『ガードベント』

機械的な音と共に両肩に装備した盾『ドラグシールド』でライオン
アンデットのクローを受け止めるとドラグセイバーによる追撃の剣
戟が連撃としてライオンアンデットの体に叩き込まれる

(…こいつ…それほど強くないな…。)

かつての戦いを戦い抜いた経験と言う名の『力』が龍騎の自信とな
っている…過去のライダーバトルの最後の戦い…仮面ライダーオー
デインとの戦いに比べれば…目の前の怪物との戦いは彼にとって戦
いではない

『ストライクベント』

素早くカードデッキからカードを引き抜き、一枚のカードをドラグ
バイザーに差し込むと龍騎の右腕にドラグレッダーの頭を象った武
器『ドラグクロー』が装着される

「はあああああああああああ!!!」

龍騎はドラグクローを装着した右腕を振り上げると同時にドラグレ
ッダーも龍騎の真上で旋回する

「はあ！
ドラグクローファイヤー
昇竜突破!!!」

叫び声と共に龍騎はドラグクローにドラグレッダーの力を溜め込み、
火炎を放ち、相手に打ち込む

ガアアアア

悲鳴と共にライオンに似た異形の怪物、ライオンアンデットの腰の
石…バツクルが左右に開く

「やったのか…？」

不自然すぎる…倒したと言うてごたえはあるが不自然すぎる…倒してもまだライオンアンデットは原形を保ったままだと言う不自然さ…

そして、閉じていたバックルが元に戻り、ライオンアンデットは再び動き出し、龍騎に向かっていく

「チツ！ こいつ、まだ！？」

龍騎が再びドラグクローをライオンアンデットに叩きつけようとした瞬間…

『Exceed Charge』

龍騎のカードリーダーとは違う電子音が響くと同時に銀色の体に光り輝く紅いラインの入った戦士が現れ、ライオンアンデットにパンチを叩き込む

「はぁ！ グランインパクトオ！！！」

叫び声と共に殴り飛ばされたライオンアンデットにローマ文字の『φ』が浮び全身を炎が包み、倒れると同時にバックルが左右に分かれて開く

バックルが開いた事で全身を包んでいた炎は消えるが龍騎の時と同様にライオンアンデットは原形をとどめている

「あれ、いつもと違う…？」

「ああ、オレも一度はそこまで追い詰めたんだけど…すぐに起き上がってきた…。」

銀色の戦士、紅き閃光『仮面ライダーファイズ』の疑問に龍騎が答えた瞬間、ライオンアンデットのバツクルが閉じて、再び二人に襲い掛かる

「「チッ！！！」」

年齢は若いがミラーモンスターとオルフェノクと言った怪物達との戦いを重ねてきた歴戦の戦士である二人の仮面ライダーは後方に飛んでライオンアンデットのクローを避けるとそれぞれの武器を構えて、ライオンアンデットを睨みつける

「…こいつ…不死身か？」

「みたいだな…。ところでお前、名前は？ こいつとの戦いの間は背中を預ける相手なんだから、それくらい聞いておきたいけど…。」

ああ、オレは夢を守る正義の味方。『仮面ライダーファイズ』だ。

「

「…正義の味方…仮面ライダーが…か。オレは龍騎…13ライダーズ最後の一人、『仮面ライダー龍騎』だ。」

正義の味方と言う言葉にファイズに気付かれないほどの小さい嘲笑を浮べ龍騎は自分の名を名乗る

「お前も仮面ライダーか？ まっ、仲良くしようぜ、同じ仮面ライダー同士な。」

龍騎はファイズの言葉に一瞬だけ、動揺を浮かべる…仮面ライダー
同士仲良く…過去の自分が聞くことは無いと思っていた言葉…ファ
イズからのそれは、自然に何の打算もないその一言が龍騎には以外
そして、嬉しかった

「…ああ…そうだな。」

龍騎とファイズが自分達に向かって来るライオンアンデットを迎え
撃とうとそれぞれの武器を構えた瞬間、別の場所から、違う電子音
が響く

『サンダー』『スラッシュ』

『ライトニングスラッシュ』

二つの電子音が響いた瞬間、ライオンアンデットも含め、その場に
いた全員の意識がそちらに向かう

彼等の視線の先に存在するのは、剣を構えた龍騎とファイズに似た
戦士がライオンアンデットに向かっていく姿

「はあああああああ！！！！」

トカゲとヘラジカに似た映像がライオンアンデットに向かっていて、
蒼い戦士の中に吸い込まれる様に消えると…彼の剣が輝き、蒼い雷
を宿す、戦士はライオンアンデットをその手に持つ二つの力が宿っ
た剣によって、切り裂く

「せい！！！！」

その一閃でライオンアンデットの体が弾き飛ばされるように後に飛び、倒れるとバツクルが再び左右に開く

「不意打ちになったが…。」

蒼い戦士はその手に持つ剣にカードらしき物を展開させ、その中の一枚を取り出す

「悪く思うな…これが戦いだ。」

不意打ちのような形で倒した相手に謝罪する気持ちを込めて、呟くと戦士は選り出した何も書かれていないカード『プロバークランク』を投げるとライオンアンデットはその中に吸い込まれ、消えていく

怪物の姿が消えた瞬間、後に残ったカードが戦士の手の中に戻る…そのカードには怪物を吸い込んだ時には描かれていなかったライオンに似た絵と『ビート』と言うスペルが書かれていた

戦士はそのカード（スピードの3）を視界に納め、それを再び剣からカードを展開させ、その中にそのカードを収める

「…スピードの3『ビート』…オレのスーツのカード…封印完了。」

そう呟き、戦士は龍騎とファイズに視線を向ける

「…ああ、お前達のおかげであのアンデットは楽に封印できた…助かった。オレは…『仮面ライダーブレイド』だ。」

（…仮面ライダー…こいつも…それにカードにモンスターを封印したって事は…。）

龍騎は油断なく、睨みつけながらブレイドを警戒するがそれとは正反対にファイズは能天気な声で口を開く

「おう、オレ達も困ってたんだ…一度倒してもすぐに復活するし…何者なんだ、あの怪物…。お前はどやってトドメを…?」

ブレイドは少しだけ考えるとため息をついて、ベルトに手を触れる

「…仕方ない…見てしまった以上、説明なし…なんて訳には行かないからな…。」

ブレイドをカブトムシを象ったスペードの紋章が彼を通過すると彼は人の姿に戻る

「まあ、他に敵の反応もないし…変身くらい解いてくれ。」

「ああ。」

ファイズがそれに従うと龍騎もカードデッキに触れる

ファイズの体が紅い光に包まれ、龍騎の体からライダーの姿が二重に分かれて、彼から離れると二人は元の姿に戻る…

三人はお互いの顔を確認した瞬間…全ての言葉を失う…彼等が見たのは何よりも信じられないものだった…

「…お前達…まさか…本当に…浩平と…輝…なのか…?」

仮面ライダーブレイド…『伊達 翔』の表情は驚愕に染まる

「…翔…それに…輝…？」

仮面ライダーファイズ…『風間 浩平』の表情から能天気さが消えて、驚愕のみが残る

「…お前達が…イヤ…お前達も…仮面ライダー…。」

仮面ライダー龍騎…『霧島 輝』もその表情に驚愕だけを残す…

別々の道を歩いていた、三人の友人達が共に共通の思い出の場所で再開する…そう…別れながらも、同じ一つの言葉に導かれるようにして…その言葉とは…

『仮面ライダー』

閑話『ミラーワールド』

鏡の向こう側…今は誰も存在していないはずの世界『ミラーワールド』…光の届かない暗い空間の中に有る石とも鉱物とも見えない机の上、そこに三つの獣の紋章の刻印された黒いケースの様な物、カードデッキが存在していた

「アナザーカテゴリー…14番目のデッキは王蛇を倒した者に渡った…そして、それと龍騎を含めた三つが神崎の残したカードデッキか…。」

三つの中の一つ…狼をイメージさせる紋章が刻まれたカードデッキが浮び…金色の人影が現れる

「…ライダーバトルは終わった…だが…『戦い』は終わらない…。オーディンは倒され、世界は滅んだ…。残されたのは…三つの古き力と新しき世界の支配者だけ…。」

『∞』を描く蛇の様な紋章の刻まれたカードデッキが浮かび上がり、黒い人影が現れる

「…奪い取らねばならない…祈りの力を…。」

八つの首が刻まれた様なカードデッキが浮かび上がり、青い人影が現れる

「倒さねばならない…『仮面ライダー』と言う存在を…。」

三つの人影の前に日本風の剣、巨大な斧、小型の銃の三つが現れ、

それぞれを手にする

金色の人影が名乗る

「我が名はブROOM…『仮面ライダーブROOM』…。」

黒い人影が名乗る

「我が名はウロボロス…『仮面ライダーウロボロス』…。」

蒼い人影が名乗る

「我が名はスサノオ…『仮面ライダースサノオ』…。」

三人の仮面ライダー達はそれぞれの武器を掲げ、重ね合わせ叫ぶ

『我等は『仮面ライダー』を滅ぼす者！！！』

彼等こそ、その世界を造る存在が最後に生み出した仮面ライダーを滅ぼすための『仮面ライダー』…その世界の名は『ミラーワールド』…生み出した存在は『コアミラー』…滅ぼすべき物は『仮面ライダー』…

運命は廻り始める… 終わったと思ったミラーワールドの戦い… 戦いに
疲れた赤き龍の戦士は… 大切な人を守り続ける白き狼の剣士は… そ
して、仮面ライダーという名の戦士達の新たな運命が動き始める

ミラーワールドと言う世界… 多くの願いの集いし世界、コアミラー
が生み出したカードデッキの仮面ライダー達… この存在は彼等の戦
いに何をもたらすのか… ?

それを知る者は誰もいない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3055b/>

仮面ライダー・スリーブレイブス

2010年10月10日16時02分発行